



スクールカウンセラーだより

令和7年 5月号

「ちょっとマシな子どものほめ方」

みなさま、ゴールデンウイーク明けのなんとも気だるい時期をいかがお過ごしでしょう？加えて、朝晩の寒暖の差に追い打ちなどかけられておられないでしょうか？体調不良のひとつやふたつは、笑って見過ごせるぐらいの余裕がほしいところですと、筆者も切に願っています。

さて、同僚のスクールカウンセラーの古川秀明先生の「子どもの叱り方を考える」シリーズに触発され、今回は「子どものほめ方」について書いてみます。それも「これで決まり！子どものほめ方」などという書店にならぶような勇ましいものではなく、ちょっと今よりマシになったり、子どもとの接し方に迷われている人に試したりしてほしい気持ちで書いています。基本、叱り方もほめ方も、当の本人が素直に反応してくれれば、何の問題もない言葉がけです。ところが、思春期を迎えた子どもたちや、第二反抗期真っただ中の中学生に対しては、途端に難しい言葉がけとなってしまいます。親は一生懸命にホメているのに、無視する「別に」「当たり前やん」の塩対応に始まり、「何が言いたいん？」「何させたいん？」の疑い、「うっせーな！」「ほっといて！」の反抗的態度まで、ホメるんじゃなかったと逆に親が後悔させられてしまうこともあるのではないかでしょうか。

ちょっとマシなほめ方の基本態度としては、具体性と主語の明

確さに気を付けるという事につきると思います。やたらほめるお母さん。「すっごーい！」「じょーず！」の連発は、上から目線、何を偉そうにという受け取り方をされる場合もあります。繰り返しますが、誉め言葉を素直に受け取ってくれたら問題は在りません。続けられたらいいでしよう。でもちょっとうまく行かなくなつたと感じるなら、「お母さん (a) は、Aちゃんが〇〇をできしたこと(b)、すごいと思うわ」と、主語 (a) と具体的な事実 (b) をもってホメることをお試しください。これだと主語がお母さんであり、思っているのはお母さんなので、「そんなことねーし」と否定はできません。具体的にホメているので、ただ何となくその時の気分でホメているのでもない。ただ、「ありがとう」とセットの子どもの満面の笑みなどという大きな見返りは、ほとんど期待できません。しかし、必ず、どこかにお母さんの言葉はヒットするものと思います。自室に返って「お母さんもけっこう私のこと、見てるじゃん」とニヤッとする可能性は高まります。日本語の主語の曖昧さや以って回った言い方は、美しくもありますが、思春期を迎えた子どもたちには、ムカツキどころ満載なのかもしれませんね。ご参考までに。

～ご予約について～

月、水、金の完全予約制です。初回のご予約は先生を通じてお申し込み下さい。2回目からは相談室で直接予約していただけます。

皆様のご来室を、心よりお待ちしております。

スクールカウンセラー 宮井 研治

